

平成21年5月24日現在

研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2006-2008
 課題番号：18520227
 研究課題名（和文）現代社会における性的マイノリティの捏造と解放にかかわるトマス・ハーディ研究

研究課題名（英文） Forging the Sexual Minority: A Study of Modern Society through Thomas Hardy

研究代表者 亀澤 美由紀 (KAMEZAWA MIYUKI)
 首都大学東京 基礎教育センター 准教授
 研究者番号 60279635

研究成果の概要：

トマス・ハーディの文学をホモソーシャル性の観点から読み解くことにより、従来の研究からはなかなか見えてこなかったジェンダーの問題を析出した。とりわけホモソーシャル性を作家—読者の間に敷衍することによって従来のハーディ研究にはほとんどなかった視点—現代社会の分析—を加えることができた点に本研究の特徴はある。本研究は近代社会が依拠してきた異性愛体制・結婚制度・家族主義をあぶり出し、かつ、近代から現在に至る過程で「同性愛者」および「ペドファイル」が周縁化・実体化されていった事実を指摘するものである。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	500,000	0	500,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	390,000	2,190,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：英米文学、ジェンダー論、表象文化論

1. 研究開始当初の背景

社会における女性の位置を考察する場合、その前提にある男同士の関係を無視することはできない。そもそも、女性が男性の支配下におかれたのは、男同士が緊密な紐帯関係を結んで女性を排除したからである。ところが従来のハーディ研究は、女性像の分析に終始し、男同士の絆（男性ホモソーシャル性）

に分析の光をあてることをしなかった。まれに男性同性愛の観点から『カースタブリッジの町長』を分析したり、女性同性愛の観点から『非常手段』を分析したりした研究が散見されたが、いずれも研究の前提を「異性愛者/同性愛者」の二項対立的思考においており、男同士の絆を連続体的にとらえたものではなかった。ましてや、男性ホモソーシャル性を全体的にとらえ、それと女性との関係を論

ずる視点は皆無だった。

実のところ、ジェンダー理論の分野においては E.K. セジウィックが『男同士の絆』(1985)において、上記の視点を既に主張しており、フェミニズム研究をジェンダー研究へと大きく飛躍させていた。となれば、セジウィックの理論をハーディ研究に援用することは、それまでなされてはいなかったが、大きな研究成果を期待できる研究方向である。そのような状況から、本研究は始まった。

従来のハーディ研究が抱えていたもう一つの問題は、それが現代社会を分析しようとする視点に欠けていたことである。ハーディ研究に限らず多くのヴィクトリア朝文学研究に見られることだが、文学研究としていかに優れているようにも、それら研究書のなかに現代社会とのつながりを見つけるとなると、著者よりもさらに一層の鋭い批評眼と洞察力をもった読者でない限り、非常に困難である。本研究がタイトルに「現代社会における」と謳ったのは、従来の文学研究が陥っている「象牙の塔」的状態に対する批判精神からであった。

そのような批判精神のもとにハーディ研究をすすめてきた結果見えてくるのは、前述のホモセクシュアルに加えて、「ペドファイル(小児性愛者)」という新たな性的マイノリティである。ゲイ解放運動の成功に伴いホモセクシュアルが人権を獲得するにつれて、それと入れ替わるべく(特に欧米社会において)捏造・実体化されはじめたのが「ペドファイル」である。その生成過程は実にセジウィックがホモセクシュアリティに関して解明したプロセスと酷似している。そのことを念頭においてハーディ研究の言説をみたとき、実にペドファイル実体化がそこでも起きていた。そうした現象は映画批評や一部の文学批評に限定されているとはいえ、社会の傾向に敏感に反応し理論構築をしておくことは研究者が担うべき重大な使命である。本研究を開始した当時、欧米に広がるペドフィリア周縁化の動きが日本社会に広がることのないよう警鐘をならすことが急務であったし、その必要性は3年後の現在、さらに強まっていると考える。本研究はそのための理論構築を、ハーディ研究を通じて実行することを目的として開始された。

2. 研究の目的

(1) セジウィックのホモソーシャル連続体理論をハーディ文学に援用し、ヴィクトリア朝社会における女性の位置を男性ホモソーシャル性との関係においてとらえる。その際、男性性・女性性というジェンダーのありようを、階級やナショナリズムといった社会のほ

かの要素に照らして布置することができるはずである。

(2) ハーディ文学をホモフォビアという近代の産物に照らして分析する。20世紀後半、ゲイ・スタディーズが盛んになって以来、19世紀には決して指摘されることのなかった種類のエロティシズムが、ハーディ批評においても取り上げられるようになった。それはホモセクシュアリティである。しかしこれをハーディ文学におけるホモセクシュアリティの発見としてとらえてしまったのでは、「異性愛/同性愛」の二項対立的思考—近代の副産物—をあらためて補強するだけに終わる。そうではなく、ハーディ言説におけるこの現象を、現代社会のセクシュアリティの照射としてとらえることが必要である。そうしてはじめて、異性愛イデオロギーを無化することができよう。そこから浮かび上がるのは、時代・階級ごとの同性同士の絆に対する認識の変化であり、異性愛結婚による家族制度維持を目指す家父長制的力の存在であり、また、従来の家族制度が揺らぎつつあることに対する現代社会の動揺である。

(3) ハーディが描く女性のセクシュアリティの曖昧さには、多くの場合「子ども」らしさが漂う。現在、欧米社会では子どもの性をめぐって一種のモラル・パニックが発生しており、一部のハーディ批評もそれを免れてはいない。本研究ではハーディの女性像を「子ども」と関連付けて考察し、そのかたわら、ハーディ研究というアカデミズムの力を借りたペドファイル実体化が行われている事実を指摘する。

性の解放が進んだ現在いままなお、我々はセクシュアリティをめぐって他者を捏造しつづけ、人権蹂躪の罪を犯していることを、本研究はハーディ文学の分析を通じて訴えるものである。

3. 研究の方法

セジウィックのホモソーシャル連続体理論を柱とし、ハーディ文学に関連するテキスト—小説・映画・批評等—を分析した。小説に関しては草稿から「決定版」に至るまでの異本研究にも視線を向けた。映画分析はこれまで注目されることのなかった点であるが、現代社会の視線がもっとも簡単に可視化されるのはこうした大衆文化であり、今後のハーディ研究の重要な一翼を担うものと思われる。

ペドフィリア研究に関しては、今なお国内外においてほとんど目立った研究がなされ

ていない。唯一、だが非常に有力な文学関係の先行研究は、ジェイムズ・キンケイドの *Child Loving*(1992)である。キンケイドは連続体理論を直接使用することはしていないが、「子ども」を大人のファンタジーの要求に応えてくれるまっさらな石板として説明する箇所などは、まさにハーディ分析にうってつけの理論である。ハーディの女性像を「子ども」と絡めて論じ、それをペドフィリアへと展開させていく際には、キンケイドの論が非常に有効である。

4. 研究成果

研究ではまず分析の方向性にかかわる二つの点を確認・発見し、それに基づき研究を進めた。

(1) 家族に関する先行研究の整理

家族に関する理論として本研究に非常に有効と思われる二つの先行研究が見出された。ひとつは Michael Ragussis, *Acts of Naming: The Family Plot in Fiction*, (New York: Oxford UP, 1986) であり、もうひとつは Tess O' Tool, *Genealogy and Fiction in Hardy: Family Lineage and Narrative Lines* (Houndsmill: Macmillan, 1997) である。Ragussis は名づけの行為をファミリー・プロットに結びつけ、女性の身体が、家を継ぐ「子ども」としてプロットを紡いでいく事実を指摘・分析する。O' Tool はセジウィックとゲイル・ルービンに依拠しつつ、女性が家族の歴史にとって常に他者にすぎないこと、そしてそれにもかかわらず家族の歴史は他者にすぎないはずのその女性の身体を通じて紡がれることを指摘している。

セジウィックのホモソーシャル連続体理論が性愛の三角形という空間的イメージを分析の道具とするのに対して、Ragussis と O' Tool は女性を媒体とした時間軸の観念を採り入れる。小説が描く空間性と歴史性の両方を分析するために、上記二者の研究が非常に有効であることが確認された。

(2) 『ラッパ隊長』の重要性の発見

当初は、「主要」な小説に焦点を絞り、『狂乱の群れを離れて』から『ジュード』までを研究対象とする予定だった。が、「マイナー」とされる『ラッパ隊長』が本研究テーマにとっては必要不可欠であることがわかってきた。すなわち、『ラッパ隊長』は男性ホモソーシャル性の典型的な類型モデルをわかりやすくとりあげており、セジウィックの理論をハーディの各小説にあてはめて論ずるにあたって、格好の導入的役割を果たすのである。その点において、『ラッパ隊長』はセジウィックの『男同士の絆』所収の『田舎女房』

論に匹敵すると言えよう。

『ラッパ隊長』はその後に書かれた『カースタブリッジの町長』とともに、歴史小説の要素をもつ。ところが、同じ歴史小説ながら前者が男性ホモソーシャル性を空間的に扱っているのに対して、後者はそれを時間的・歴史的に扱っていることが明らかになってきた（詳細は後述するとおり）。

偶然とは言え、どちらもハーディの執筆活動の中盤の作品であり、『カースタブリッジ』以降、ハーディは『森林地の人々』『テス』『ジュード』という「主要」作品を次々と世に出すことになる。

そこで、当初の計画をあらため、本研究(平成18年度-20年度)の焦点をハーディ中期から後期の小説に絞り、『ラッパ隊長』を研究論文本文論のなかの序として位置づけることにした。

(3) 以下は研究の詳細である。

① 『ラッパ隊長』—イギリス国民誕生の物語

ナポレオン戦争に時代設定したこの小説は、男同士の絆を「イギリス 対 フランスおよびその他の周縁部」という空間的広がり重ねて描き、ナポレオン戦争によって主体が「イギリス人男性」として切り出されていく様子を浮かび上がらせる。この小説の特徴は、ナショナル・アイデンティティとジェンダー・アイデンティティの獲得が相補的になされる様子を描いた点にあり、それはナポレオン戦争という特殊な歴史的状況に力を借りてはじめて可能な作業であったと思われる。

ハーディのあからさまに悲劇的な他の小説とは異なり、『ラッパ隊長』は喜劇的要素を多分にもつ。そのひとつの大きな原因は、これがホモフォビアに毒されない、前近代的なセクシュアリティの意識のなかに描かれているからである。「イギリス国民」という国民意識は近代化とともに形成されていったものであるが、それがセクシュアリティに関しても前近代的精神—ホモフォビアからいまだ自由な精神—のなかに最初は胚胎したものである、という事実は、まさに近代・異性愛主義・ナショナリズム・近代的ジェンダー観が車の両輪となって進んでいったことを如実に物語るものである。

② 『カースタブリッジの町長』—セクシュアリティの近代

『ラッパ隊長』が近代とセクシュアリティの関係を空間的に描いたのとは対照的に、『カースタブリッジ』は近代化が男性のホモ

ソーシャルな絆のかたちに与えた影響を歴史的・時間的に辿る。前近代において西洋社会が享受していたのは、ホモフォビアを伴わないホモソーシャルリティであった。それが近代にはいつ、異性愛による家族を規範とする、ホモフォビアに駆られた近代的ホモソーシャル性へと変容していく。ヘンチャードの物語は、セクシュアリティの近代を一個人のなかに凝縮・ドラマ化したものと言える。と言うのも、青年ファーフリーとの男同士の絆に至福を感じていたヘンチャードの前に、妻スーザンや愛人ルセッタが過去の深みから現れ、異性愛と折り合いをつけるよう迫られることによって悲劇は始まるのだから。

さらに加えて、カースタブリッジをゼロ地点としてセクシュアリティの近代を辿るこのテキストは、現代のセクシュアリティをも記述する。ヘンチャードが「同性愛者」であるとか、彼は自らのセクシュアリティに気づいて自滅したのだといった主張の是非を議論することが目的なのではない。むしろ、ヘンチャードの物語からそうした議論をしがちな現代の我々の認識のありようを問題にするのだ。現代社会のセクシュアリティもこの物語が描く近代的セクシュアリティの延長線上にある—そのことを示すのが本論の狙いのもう一点である。

上記二点を目的としてこの小説を分析したとき、そこにあらわれるのはジェンダー形成と階級と近代化の関係である。

③『森林地の人々』—結節点としての女の身体

1章・2章が男性性をめぐる議論であったのに対して、3章は女性のセクシュアリティに焦点を移す。ただし、男性性を議論の埒外におくのではなく、この小説では女性の主体性を通じて男性性が語られることを指摘し、「男らしさ」と女性の主体形成とがひとつのテーマとして撚り合わされている様子を分析する。

女性のセクシュアリティを議論の中心に据えることによって、1,2章では議論することのできなかつた、重要な問いが浮上してくる。すなわち、異性愛を通して男同士の絆を結ぶという男性ホモソーシャル性の原則は、当の女性たちにはどのような意味をもったのか。ここへきて、前述の Ragussis や O' Tool の研究が有効になってくる。本論は、女性の身体を男性のホモソーシャルな欲望が集約・分散する結節点であり、同時に男性中心主義の歴史が紡ぎだされていく点である、と考えることにより、女性と歴史・家族の歴史を議論の遡上に載せる。

『森林地の人々』のもう一つの重要性

は、それがハーディ文学のなかでも結節点をなすという点である。これまでハーディが扱ってきたテーマがすべてこの小説に集約され、しかもそれらがグレイスのセクシュアリティと結婚制度という新たなテーマと撚りあわされて、後の『テス』『ジュード』へと展開されていくのだ。その意味でもまた、この小説は「結節点」と呼ぶにふさわしい作品である。

④男同士の絆の向こう—『テス』の三角形

『ラッパ隊長』が前近代的な多幸症的世界にあったとすると、『テス』は完全に近代的な、すなわちホモフォビアに貫かれた、悲劇的世界にある。エンジェルの悲劇は、ホモフォビアに駆られた男の悲劇である。本論では、ホモソーシャルな絆に対するアレックとエンジェルの対応の違いを比較し、そこに新旧中産階級の違い—一家父長制・資本経済に対する態度の違い—を重ねる。

この点を研究していくと、当然ながらエンジェルとアレックの絆の意味について論ずる必要がでてくる。テスに対して片方は純粋な少女、もう片方は性の手ほどもを待つ少女のイメージを押し付ける。男たちの性的ファンタジーの対象としてテスが供されていることに変わりはないのだが、片方は道徳的（道徳的すぎた）男性として、片方は野獣のような男性として語られる。だが、この両者の間に実質的な相違は実はないのではないか。そう考えるとき、エンジェルとアレックの絆は、「子ども」のセクシュアリティに対する成人の視線を「健全な市民」から「ペドファイル」へと並べた連続体としてあらわれてくる。『テス』に関して執筆した2本の論文（次項参照）では、『テス』の小説および映画に関する批評のなかの言葉を分析することにより、現代社会の大人と子どもの絆の連続体上にペドフォビアという亀裂が発生していることを指摘した。

⑤『ジュード』

これまでの議論を受けて、『ジュード』論を今後展開する予定である。必要とされる視点は、グレイスに胚胎し、テスで大きくふくらんだ「子ども」のような女性というテーマである。テスの身体が明らかに豊満であったのに対し、スーの身体ははるかに sexless なイメージでとらえられており、「子ども」のテーマを展開させるのは格好の場となるはずである。そこに、ホモソーシャルな絆—ジュードとフィロットソンの間の絆、ジュードと

家父長制社会の間の絆、ハーディと読者の間の絆などがどう関わっていくかを見ていく必要があるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 亀澤美由紀「『カースタブリッジの町長』—セクシュアリティの近代」、『人文学報(表象文化論)』(首都大学東京)、416号、25-42頁、2009年、査読無
- ② 亀澤美由紀「『ラッパ隊長』—イギリス国民誕生の物語」、『ハーディ研究』(日本ハーディ協会)、34巻、53-69頁、2008年、査読有
- ③ 亀澤美由紀「テス批評にみるモラル・パニック—ベッドフォビアの毒」、『人文学報(表象文化論)』(首都大学東京)、401号、25-37頁、2008年、査読無
- ④ 亀澤美由紀「男同士の絆の向こう—『テス』の三角形」、『トマス・ハーディ全貌』(日本ハーディ協会編)、326-342頁、2007年、査読有

6. 研究組織

(1) 研究代表者

亀澤 美由紀 (KAMEZAWA MIYUKI)

首都大学東京 基礎教育センター 准教授

研究者番号 60279635

(2) 研究分担者

無し

(3) 連携研究者

無し